

## ネパールの交差点：信号機とロータリー

谷川昌幸

ネパールに行くたびに不思議に思うのが、交通信号機である。カトマンズ盆地の主要交差点には、日本などの援助で信号機が設置されているが、それらのほとんどすべてが消灯か点滅であり、赤・黄・青と常時正常に機能しているものは、まず見かけない。日本の常識で考えると、交通信号は最重要インフラであり、信号機があるのに消灯であれば事故多発、人命に関わる一大事である。ところが、カトマンズでは、最新式信号機が設置されていても、たいてい消灯。これは不思議。なぜだろう？

### 1. 信号機の技術的不適正

交通警察に問い合わせたわけではなく推測にすぎないが、理由の一つは、おそらく電力事情であろう。カトマンズでは、乾期には一日十数時間の計画停電となる。突然の停電も少なくない。もし交通信号がその都度点灯・消灯となれば、混乱し、かえって事故多発となる。そこで、それを避けるため、すべて消灯あるいは点滅としているという説明。これは合理的な理由であり、その限りでは納得できる説明である。

しかし、もしそうだとするなら、そのような電力事情の国になぜ電力依存の交通信号機を援助したのか、という疑問が生じる。いくら最新式でも、実際には使いものにならず、邪魔なだけの木偶の坊にすぎない。だから放置され、破壊され、数年もすると見るも無惨な残骸と化す。これは、途上国援助における適正技術の問題である。



■ 消灯信号機と仮設ロータリー

(タパタリ, 2012.11.18)

### 2. 「人の支配」としてのロータリー式

しかし、カトマンズの信号機消灯は、単なる技術の問題ではないように思われる。ネパールの主要交差点は、以前は、ロータリー式であった。これは、交差点の中央に円形の台地(ロータリー)をつくり、車は前後左右の他車の動きを見ながら相互調整し、交差点を通過する方式。右回りなど、最も基本的な原則は定められているが、それ以外はすべて運転者のその場の判断にゆだねられる。一見、危なそうだが、実際には事故は少なく、ひどい渋滞もほとんど発生しなかった。交通量が少なかったことを考慮しても、ロータリー式はネパールに適した交差点であったといつてよいであろう。

ロータリー式は、交通整理の原理が、信号機とはまったく異なる。信号機は「赤は止まれ」「青は進め」と、機械が一方的に命令し、強制的に従わせる。それは、合理的なルール

(規則・法)の強制であり、客観的な「法の支配」である。これに対し、ロータリー式は、相手(外見・地位・身分など)とその動きを見て自分の動きを決める、主観的・相対的な「人の支配」である。信号機は、客観的な規則にさえ従えばよいのだから、まったく見知らぬ他人同士であっても、有効に機能する。ところが、ロータリー式は、相手と自分の関係が、瞬時に、多かれ少なかれ了解されるところでないと、うまく機能しない。逆にいうならば、ロータリーがネパールで機能していたのは、ネパールが近代市民社会ではなく、相手との関係を容易に了解しうる伝統的共同社会であったからである。

もしそうであれば、そのネパールに信号機を持ち込んでも、うまく機能しないのは当然である。運転者は、信号よりも、周囲の人々との関係を見計らい、車を運転する。窓口に有力者が来れば手続きが優先処理されるように、路上でも信号よりも人、多かれ少なかれ目上優先である。

### 3. 「ババ事件」の教訓

2005年5月18日の「ババ事件」を思い起こしてほしい。ババさんはJICAシニアボランティア交通指導員。この日、ニューバネスワル交差点で交通指導していると、そこに武装警察総監の車がやってきて、当然のように赤信号を無視し通過しようとした。おそらく、これまでは「総監」だから、警官も誰も、それをとがめなかったのだろう。しかし、「交通規則」遵守を指導するため日本からやってきたババさんは、これを見逃さず、「法の支配」の立場から、毅然として停車を指示した。お供の武装警官は血相を変えて怒り、通せと要求したが、ババさんはいささかもひるむことなく、信号無視した総監に運転免許証の提示を求めた。総監は免許証を持っていなかった。面目丸つぶれの総監は、ババさんに自分の車で役所に行き話をすることを求めたが、ババさんはこれも断固拒否、自分に課せられた交差点での交通指導の任務を続けた。この経緯の一部始終は、取材中のジャーナリストにより目撃され、写真付きの記事となり、新聞で大きく報道された。これにより、ババさんはネパール庶民の喝采を浴び、一躍、時の人となった。

この「ババ事件」は、ネパール文化の基調が依然として「人の支配」であることを何よりも雄弁に物語っている。たとえ交差点に信号(規則・法)があろうが、実際の交通は相手の「人(外見・身分・地位)」をみて調整される。ババさんが喝采を浴びたのは、その「人の支配」のただ中で、敢然と「法(信号・規則)の支配」を貫き、役所での裏取引もきっぱりと拒否したからである。しかし、ここで見落としてならないのは、ババさんは外人だという冷厳な事実である。ババさんが「法の支配」を貫徹できたのは、結局、彼が日本の権威をバックにしていたからであり、また、「法の支配」が、所詮、外国のものであったからにほかならない。

ネパール社会が、このような「人の支配」文化を基調としているとするならば、信号機があっても使われないことも、また信号点灯時よりも消灯時の方が交通がスムーズで渋滞が少ないことも、何ら不思議ではないことになる。あるいはまた、憲法や法律に何を定め

ようが、実際には、それらはあまり守られることなく、物事はたいてい関係者間の取引により決められてしまうことも、至極当然といってよいであろう。

#### 4. ネパール文化から学ぶ

しかしながら、これは優劣ではなく、文化の質の違いの問題である。ロータリーと信号、「人の支配」と「法の支配」、共同社会と利益社会——そのいずれがよいかは、一概に言えない。ネパールがいまもって不思議の国であり興味が尽きないのは、原理的に異なる二文化がいたるところで出会い、せめぎ合い、格闘しているからである。私たちはネパールから多くのことを学ぶことができる。近い将来、日本の交差点も、環境を整備しつつ、信号式からロータリー式へと切り替えられていくかもしれない。

(ネパールの視覚障害者を支える会『会報』第35号, 2013年3月, 3-4頁)